

祈る存在

年間第29主日C年

今日の典礼は、祈りについての教えというよりも、絶え間なく祈る、休みなく祈るようという訓戒と言えましょう。毎日ロザリオを唱え、金曜日には十字架の道行きをする信心深い信徒がおり、また年に一回、毎日の生活から離れて数日間、黙想の家でみ言葉に専心して祈る信徒がいます。私たちは皆、生活の中で祈る時間を取る必要を感じていますが、今日の典礼は、ちょうどスポンジが水を吸い込むように、祈りに貫かれるような有り様になることへ私たちを招いています。言い換えるなら、神に対して常に開かれている存在として生きるよということ。生きるかぎり人間は、時間の流れの中に、途切れることも中断されることもなく存在しています。祈りについて似たようなことが言えないでしょうか。

イエスご自身に照らし合わせて、絶え間なく祈るということについて思いめぐらしてみましよう。ヨハネはその福音書の中で、宇宙が存在する以前に、御父のみ言葉が存在することについて語ります。「初めに言^{ことば}があった。言は神と共にあった。言は神であった」（ヨハ1・1）。そこで、「言は神と共にあった」という場合、ギリシア語の原文でプロスという助詞が使われていますが、その助詞には方向性という意味合いが含まれています。み言が人間とされたということを考えるなら、その言葉は大事なものとなります。つまり、人間とされたみ言は、元来、神に向かっています。実は、み言が人間とされたのは、ご自分の生活と存在によって御父を啓示するためでした。御父のことを明らかにしてくれると共に、まことの人間の生活がどのようなものであるかを教えてくれます。つまり生活が御父に向けられ、御父への道を歩もうとする度合いに応じて、それは本物になります。御父へ至る道は、私たちの手に置かれています。すなわち、福音書です。私たちの内に働く聖霊に協力するなら、福音書は単に本に書かれているインクのしるしではなく、私たちが歩む真の道となるのです。言い換えるなら、人間とされた御子に倣って歩むかぎり、私たちの生活は本物になると言えるのです。したがって、福音書を手にして、その内容を私たちの血となり肉となるように思いめぐらしながら読み返すことが、どれほど大切なことか分かります。コルカタのマザーテレサが、簡潔にそれを言い表してくれました。「あなたが神の子であることに喜びなさい。そうすれば、神の現存があなたの骨に浸透し、その勢いで、歌い、踊り、祈り、愛するという自由をいただけるでしょう」と。

彼女の言葉は生活全体のことを言っています。それは次の詩編で表現されている心構えを生きるように言っているのです。「枯れた谷に鹿が水を求めるように、神よ、私の魂は、あなたを求める。神に、命の神に、私の魂は渴く」（詩42・2-3）。これを聞くと私たちは、そうした神への飢え渴きをそれほどまでに実感していないと言うかもしれません。ですが、それこそ必要な問いを呼び起こしてくれるのです。神なしの生活は確かに、水のない土のように、渴ききっています（詩63参照）。その渴きを実感していないなら、それは、神のいない世界が提供する水によって、一種のマヒ状態に陥っているのかもしれません。たとえそうであっても、ゆるしの秘跡に助けられて神に立ち返り、御父への道を再び見いだすことができるでしょう。そうすれば、絶え間なく御父に向けられていたイエスの生き方は、私たちの生活に映し出されるようになるでしょう。その生活には、確かに祈りが浸透していくからです。

このように、福音書が求める祈りは、多くの言葉を繰り返すことではなく、ある生活の仕方、ある存在の仕方を身につけることへの招きである、ということを考えてみました。そうしたあり方については、いろいろな形が特徴づけられますが、ここでは、一つのことを中心にしました。すなわち、神の子であるみ言は、永遠の内に御父と共におられますが、人となられると、その生活は全面的に御父に向けられた生ける道そのものでした。私たちもその道を自分の道にするなら、存在は祈りに溢れ、生活は聖霊によって御父に向けられるでしょう。ですがこうしたあり方のもう一つの大事な特徴について考えてみたいと思います。

ヨハネは福音書の序文に、^{ことば}言は神であり、御父と共におられたと述べてから、「言によらずに、成ったものは何一つなかった」と言っています（ヨハ1・3）。つまり宇宙全体、宇宙に存在する一つひとつのものの根拠が、み言の内に見いだされます。み言が、神としてその役割を果たされたように、人間としてそれを完成しなければなりません。つまり、御子は、十字架上の奉獻によって、宇宙全体を御父のもとに連れ戻さなければなりません。十字架は実に深い意味をもっています。一方、祈るキリスト者の存在は、そのみ言の課題に参加しています。例えば、太陽と星は、その輝きによって神の栄光を物語っていますが、太陽も星もそれを知りません。しかしキリスト者はそれを知っているので、星や太陽の輝きと自分の奉獻を共に御父にささげます。また、大自然はその美しさをもって神の栄光を歌っていますが、大自然はそれを知りません。しかしキリスト者は、自分の奉獻と共に大自然を御父にささげます。また、多くの労働者は汗を流して神に奉仕していますが、信仰について聞く機会がなかったので、それを知りません。キリスト者は、自分の奉獻と共にその多くの兄弟姉妹の仕事を御父にささげるのです。聖パウロはこれについて次のように言っています。「すべてのものはあなた方のもの、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のもの」と。（一コリ 3.22～23）その言葉の内に、キリスト者の祭司的な課題が示されています。祈りによってキリストの司祭職に与るのです。キリスト者の祈りにはこうした祭司的な役割があるのです。

聖霊が、私たちキリスト者に「祈る存在」としての崇高さを深く実感させ、その存在の豊かさをより深く悟らせてくださいますように。アーメン。

J. E. Perez Valera S. J.